

「日米経済連携強化が必要である」

佐野 日本語でやろうと思っていたのですが、たまたま英語でつくってしまったものなので、申しわけありませんが、英語でさせていただきます。

今日は21世紀に向けての日本の対外経済政策について私的なコメントをお話しいたします。いわゆる経済連携、経済のパートナーシップのもつ意味、特に日米経済連携の重要性というお話をしたいと思います。また、経済のパートナーシップの議論においてこういった点で前進させることができるかということをお話します。

今 David Asher さんが提起されたようなさまざまな案を歓迎したいと思います。ぜひ活発なディスカッションを期待したいと思います。

ちょっとご注目いただきたいのですが、経済産業省は、対外経済政策を WTO 一辺倒のアプローチから転換して、WTO 以上の相互利益がある国や地域とは経済連携協定を結ぶというマルチレイヤーのアプローチに変えています。これらに関する私の考えと経済産業省で起きつつあることをお話します。

この10年、グローバルな企業環境に大きなパラダイムの転換がありました。その一つは、民主主義と市場経済の優位性が冷戦崩壊後明確になったということ。第二に、より広範な、また迅速な IT 技術の革命がありました。そしてまた国際メディアの発達も加速化しました。三つ目は「物理的なグローバル化」と呼びたいのですが、つまり大型航空機や、また大きな人の流れ、そしてコンテナ船による海運が発達したということで、このようなグローバル化の結果、技術的な革新によって地理と時間の制約から開放がもたらされ、我々は、企業側が理想的な事業環境を求めて国、都市を選択する時代に入ったということです。

したがってすべての国の政府は人材、モノ、マネー、情報、さらにはソフトウェア、ハードウェア・インフラを事業環境として提供するための競争を余儀なくされるようになります。

した。アメリカが当面はベストプラクティスを示している感じがします。

さて、これが対外経済政策だけでなく、経済政策全般の問題となります。議論を待つまでもなく、WTOこそが主たるシステミックな枠組みとして国際企業環境を支えるものであり、我々はカタルドでニューラウンドを立ち上げるため最善を尽くすコミットを真剣にしています。しかしこの新しい分野でシステミックな調和を進めようと思ってもWTOという場では進展を得ることはなかなか難しい。そういう事例はたくさん経験済みであり、これをバイ、あるいはプルラテラルでいくつかの国々で協議をするなり、APEC、OECDという枠組みの中で対応することは日本の利益であるばかりでなく、これが駆動力となって21世紀にふさわしい国際的なビジネスのシステム、また環境ができると思うのです。

その「エコノミックパートナーシップ」、括弧つきで言いますが、日米の経済提携についての私の考えは、日本側の対外経済政策という観点から生み出されたものです。しかし日本もアメリカも世界経済に大きな影響をもちますので、もしこの日米対話において両国が21世紀の経済パートナーシップの可能性について突っ込んだ議論ができれば大変意義深いと思います。特にグローバル化が進む中でアジア太平洋地域はさらに人と情報、そしてモノの流れの中核になると期待できます。もちろん日米間のフローがこの地域では最大のものになっていくでしょう。そして両国が改革を強化しつつ経済構造改革を進め、また企業関連の制度調和を高めれば、21世紀のアジア太平洋の企業環境を確立するための、前向きのペースセッターとしての役割を果たすことができます。

ただ、重要なことの一つ目として、21世紀の日米経済提携の形、やり方、それから内容を考えるときに、お互いに認め合うパートナーとしての関係を築くことです。このためには日米の安全保障関係、また日米同盟関係を抜本的にオーバーホールする必要があると思うのです。

二つ目は、日米の経済パートナーシップに対応するために必要なのは、合意とか協定とい

った形で今すぐの結果を求めるのではなくて、21世紀の新しい日米関係を築くためのコンセプトをしっかりと打ち出していくということだと思います。

三つ目は、その経済パートナーシップの内容ですが、グローバル化の波にのるものでなければなりません。つまり具体的な貿易問題だけをレビューしていたのでは、経済パートナーシップに反対の声が上がり、この経済連携が結実する前に話し合いはデッドロックになってしまうでしょう。21世紀の新たな日米関係づくりのために我々が直面する作業が、膨大なものであるということを切実に感じます。しかし私はぜひとも方向転換を促して、これからの経済パートナーシップに向けて、21世紀に見合った広いキャンバスに大きな絵をかき上げる必要があると思います。ありがとうございました。

中川 ありがとうございました。

それでは3番目のスピーカーは服部さんです。今の David Asher さんと佐野さんのプレゼンテーションについて経済界から見たコメントをむしろお願いしたいと思います。